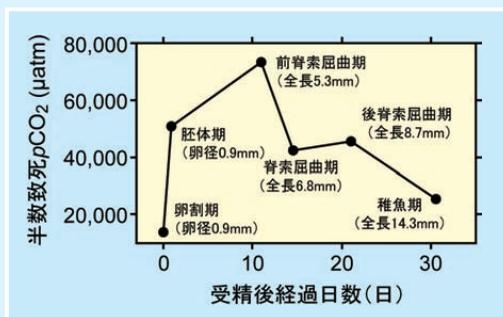


## CO<sub>2</sub>が海洋生物におよぼす影響(2)

マダイの二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)耐性を調べるために、卵から稚魚まで成長を追ってCO<sub>2</sub>影響実験を行いました。その結果、マダイのCO<sub>2</sub>耐性は一度高くなったあと再び低くなる傾向が認められ、発育段階によって異なることが分かりました。下図は成長に伴うマダイの半数致死CO<sub>2</sub>レベルを示しており、CO<sub>2</sub>耐性の指標となります。このマダイの実験は海生研ニュースNo.83で詳しく紹介しています。

(中央研究所 海洋生物グループ 吉川 貴志)



マダイの成長に伴う半数致死CO<sub>2</sub>分圧(pCO<sub>2</sub>)の変化  
(自然海水のpCO<sub>2</sub>は約380µatm)

財団法人海洋生物環境研究所は、発電所の取放水等が海の環境やそこに生息する生物に与える影響を科学的に解明する中立的な調査研究機関として、農林水産省、経済産業省、環境省の共管のもと、昭和50年に設立されました。

これまで大規模発電所の取放水が生物に及ぼす影響の解明を中心に、食の安全・安心や海生生物の保護に係わる海洋環境中の微量化学物質や放射能の実態把握等の調査研究を国や民間からの委託をうけて実施しております。

海の豆知識 第32号

平成19年7月 発行

発行所

財団法人 海洋生物環境研究所

事務局 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29 帝国書院ビル5階 ☎(03) 5210-5961  
中央研究所 〒299-5105 千葉県夷隅郡御宿町岩和田300 ☎(0470) 68-5111  
実証試験場 〒945-0017 新潟県柏崎市荒浜4-7-17 ☎(0257) 24-8300

海の豆知識に関するお問い合わせは、事務局までお願いします。  
<ホームページ> <http://www.kaiseiken.or.jp/>

かいせいけん

# 海の豆知識

Vol.32

★★★ 魚のことわざ ★★★



財団法人 海洋生物環境研究所

# 魚のことわざ

(その30)

—アユ—

海とその生物にまつわる<sup>ことわざ</sup> 諺や格言についてお話ししましょう。  
今回のテーマはアユ(サケ目アユ科アユ属)です。

アユの成魚は川で生活し、全長は10~30cmになります。秋に成熟した親は、河川の中流から下流域へ移動して産卵し、仔稚魚は一時的に海で生活した後、翌年の春から初夏にかけ河川を遡上します。このような回遊は「両側回遊」(りょうそくかいゆう)と呼ばれます。ただし琵琶湖などに生息する湖沼陸封型(いわゆるコアユ)は、海の代わりに湖を利用します。

アユは、縄張りを持つ習性を利用した「友釣り」がポピュラーであり、全国河川のアユ釣り解禁日には、多くの釣りファンが河川に集まります。



## 3 「鮎の寄るところ竿が寄る」

アユは釣り人が集まっている場所で釣れば、まずあぶれることがないといわれる。大勢が知らず知らずに集まるところは、やはり良いポイント。釣りは一に場所である。



## 4 「初夏の増水後は豊漁、秋の増水後に好漁なし」

アユ釣りに関する言葉。春の若鮎は上流の清流域を目指して遡上するが、大雨などの増水で押し戻されても再び遡り、「差し返し鮎」「差し戻し鮎」と呼ばれて、また釣れるようになる。しかし、秋は産卵期を迎えて「落ち鮎」となり、川を下るので、このときに増水があると、そのまま下ってしまい二度ともどっこない。



## 5 「岐阜の鮎、水戸の鮠、明石の鯛」

アユ・アンコウ・タイの美味な筆頭産地。岐阜のアユは長良川、水戸のアンコウは千葉県銚子沖~福島県常磐沖、明石のタイは徳島県鳴門海峡~兵庫県明石で捕れる。



## 1 「鮎の太りと麻の太りと連れている」

アユと麻は、目に見えて大きくなる、という石川県地方の言葉。アユはアユ科の一年魚、麻はクワ科の一年草。一年で使命を達成するためには、ポヤポヤしておられない。春に生じて秋には子孫を残し短い一生を終るのである。



アユと花について

## 2 「鮎小花(和歌山地方でイワヤナギのこと) 「蕎麦の花が咲けばアユが下り始める」

アユは清流の魚であるが、河口で生まれて海で育ち、清流で「成鮎」となり秋には「落ち鮎」となって川を下り、産卵をして短い一生を終える年魚。イワヤナギが咲き出すと、若アユが遡上し始める。初夏の到来。秋に蕎麦の花が咲く頃、腹子を抱いた鮎が産卵のため、河口に向かうこと。紀伊地方の言葉。